

第 9 回 市民動物園会議

会 議 録

日 時 : 平成 2 2 年 6 月 3 日 (木) 1 4 時開会
場 所 : 円山動物園内 動物園プラザ

1. 開 会

○原田委員長 定刻になりましたので、第9回市民動物園会議を開きたいと思います。

2. あいさつ

まず最初に、動物園からごあいさつをいただきます。

○事務局（加藤環境局理事） 皆様、こんにちは。

この4月1日付で環境局の理事になりました加藤でございます。

きょうは、第9回の市民動物園会議でございますが、私にとってみれば第1回目の動物園会議でございます。皆様方のご意見を伺いながら、よりよい動物園を目指して頑張っていきたいと思っております。

どうかよろしく願いいたします。

○事務局（酒井円山動物園長） 皆さん、こんにちは。

円山動物園長の酒井でございます。

私は、この4月でようやく1年になりました。前回、第8回の委員会は不覚にもA型インフルエンザで欠席してしまいました。職員のみんなにはインフルエンザには気をつけろと私が言っていたにもかかわらず、唯一、私のみが感染したという大変な不始末をしてしまい、大変ご迷惑をおかけしました。

きょう、お集まりいただきました皆様は、今回が第1回目ということで、昨年度の実績報告等を中心にお話しさせていただきたいと思っております。

おかげさまで、今のところ、金澤前園長が敷いたレールに乗りながら、ようやく少しずつ動き出していると思っております。後ほど、その辺についてもご説明をさせていただければと考えてございます。

それから、4月1日付で私ども円山動物園の新しいメンバーが来ておりますので、私からご紹介したいと思います。

まず、こちらに座っておりますのが飼育展示課長の柴田でございます。上野課長の後任でございます。

教育展示・繁殖調整担当係長の萬でございます。

経営係長の佐々木でございます。北川の後任です。

調整担当係長の菅です。彼も北川の後任でございます。

以上、こういうスタッフでやりますので、よろしく願いいたします。

○原田委員長 ありがとうございます。

3. 議 事

○原田委員長 それでは、早速、議題（1）平成21年度運営状況報告に入らせていただきます。

資料説明を動物園長からお願いいたします。

○事務局（酒井円山動物園長） 私から、資料に従いましてご報告させていただきたいと思ひます。

まず、資料2-1で、カラーの表とグラフをごらんいただきたいと思ひます。

昨年、平成21年度の入園者は、トータルで92万3,503名です。おかげさまをもちまして、昨年目標としておりました80万人を大きく上回りました、90万人の大台を14年ぶりに突破したということで、新聞等にも書かれました。何と申しても、昨年3月20日から公開いたしました双子のホッキョクグマが大きな原因で、4月、5月、6月と非常に大きなお客様の伸びを示しました。あわせまして、5月2日には、ユキヒヨウの双子も生まれまして、その辺の相乗効果が出ました。それで、円山動物園に一度行ってみようかという機運が非常に高まったのではないかと申しております。昨年のゴールデンウィークは非常に好天にも恵まれたということで、ゴールデンウィーク期間中だけで11万人と前年5月のほぼ1カ月分の入りを8日間で集客したということでございます。

続きまして、ツイズ効果が夏休みも続きまして、8月の1カ月で15万人と、これも昨年の44%増を記録いたしました。

9月にもシルバーウィークという5連休がございまして、ここでのちの感謝祭という収穫祭的なものを職員の発案により企画いたしました。これも好天に恵まれ、この期間中だけで約4万人のお客様に来ていただきました。9月中に既に昨年1年間の入園者である70万人を突破してございます。

そして、11月中に80万人、そして冬の動物園など冬期の集客にも力を入れたことが功を奏しまして、2月中に90万人を突破し、最終的には92万3,503名となったところでございます。

グラフを見ていただくと、非常におしかったと思ひるのは、ずっと前年を上回っていたのですが、3月だけは19年度、20年度を下回りました。これは、皆様も記憶に新しいかと思ひますが、3月は天候が非常に不順で、雪解けが早い割に、その後もずっと雪が降り続いたことが大きな原因かと思ひます。もう一つは、2月の末に、今回の集客に大きく寄与してくれた双子のツイズが帯広に行ったことも影響しているのかなということでございます。

資料2-1の入園状況については以上でございます。

続きまして、行事等の報告をしたいと思います。

資料2-2でございます。

昨年開催しましたイベントは、一昨年にも続きまして92を上げてございます。1番、2番、10番など、アニマルファミリー会員向けに行われたイベントだけでも14が含まれております。それと、林委員のアイデアから始まりました73番の恋人たちのクリスマスナイトZOOです。これにつきましても、非常に好評でございまして、3年目を迎えました。私も、恥ずかしながら、サンタにならせていただきました。

それと、円山動物園の特徴の一つであります、市民が参加するイベントや企業、NP

〇、大学などと協働して行われるコラボイベントが非常に多く、全体の8割を占めるに至っております。

それと、3番目の子育て支援のイベントの子育てサロンも円山動物園で行われるイベントとして定番になった感がございます。

また、先ほども言いましたけれども、35番の9月19日から23日にかけて行われたいのちの感謝祭です。これは、私が着任当初の4月に飼育係の皆からいのちに感謝するイベントをこの5連休を使ってぜひやりたいということで、職員がプロジェクトチームをつくって企画したものでございます。5日間で3万9,636人、1日平均約8,000人の集客でした。秋口としては非常に画期的な集客に結びつけたところでございます。

そして、89番の円山動物園感謝祭というものもございました。これにつきましては、2月に90万人を突破いたしまして、お客様にぜひ感謝したいということです。これも職員からの発案でございまして、お客様に感謝するとともに、来年度に向けたリサーチ的なイベントをつくりたいということで、3月20日から22日の3日間にわたって実施いたしました。内容としましては、年間パスポートをお持ちの方はもう一人お友達をお連れして入場できるということです。それと、1日10個以上のドキドキ体験メニューをこの中で行い、全員参加を目標にこの3日間実施いたしました。

これは、先ほども申し上げましたが、残念ながら集客には結びつきませんでした。3日間とも寒さと雪にたたられまして、お客様の人数は3日間で3,266名でしたが、職員の結束と士気を高めるという意味では意義があったイベントではなかったかと評価しているところでございます。

続きまして、資料2-3の寄附受理状況でございます。

そこに、21年度の決算見込み額と一昨年度の平成20年度を並列して書いてございます。左側は昨年度の決算見込み額でございます。

まず、アニマルファミリーです。昨年は600万円近くの入会をいただきまして、前年比は182%でございます。それと、企業、団体からのご寄附につきましては、1,675万2,000円余で、こちらは241%増でございます。それと、市民からの寄附につきましても、5倍で、100万円を超えてございます。

それぞれ要因別の表が下にございます。

グッズの売り上げに関しましては350万円になってございます。主なものを言いますと、この中にはワードエム様で発行のカレンダーやカードで120万円余の寄附をいただいております。それと、菓か舎様が三八の方で発売されましたピリカの顔を使いました札幌タイムズスクエアの売り上げが好調で、こちらでも100万円を超えるご寄附をいただいております。トータルで2,300万円の寄附受理の状況でございました。

このほか、ライオンズクラブ様より園内4カ所にソーラー時計、350万円相当をご寄附いただいたり、熱帯動物園館の横でジェラートを販売しておりますレ・ディ・ローマ様よりドキドキ体験のときに使ってほしいということでワイヤレス放送設備50万円相当の

ご寄附など、その他一般のお客様からリンゴやブドウ、芋、カボチャなど、たくさんのお気持ちをいただきましたことをご報告したいと思います。

続きまして、裏をごらんください。2-4でございます。

主な新着動物出産、転出状況についてのご報告でございます。

昨年の第8回以降のお話をさせていただきたいと思います。

12月から1月にかけて、リスザル9頭の誕生を確認しております。それから、キキと命名しましたサーバルキャットの雌が1月16日に南アフリカ共和国から入ってございます。それと、2月22日にホッキョクグマの雌のピリカが帯広動物園より来園いたしました。ホッキョクグマの雄のデナリが釧路動物園から来園してございます。

これにつきましては、資料の後ろから2枚目に北海道地図がかかれたものがあると思いますので、これで簡単に趣旨をご説明したいと思います。

実は、この移動につきましては、絶滅危惧種でありますホッキョクグマの繁殖に向けて、今やれることを迅速にやろうという話し合いを道内園間で急遽持ちました。といたしますのは、一昨年に釧路動物園に貸し出ししておりました私どもの雄のデナリと2年前からペアリングをしておりました釧路動物園のクルミがことしの1月3日に初めて交尾が確認され、その後も非常に順調に続いているという報告を受けました。それであれば、デナリを円山動物園に戻して、再度、双子のお母さんのララとの繁殖にチャレンジできるのではないかとということが一つです。また、デナリと相性が悪くて、2年間の同居の末、繁殖行動に至らなかったサツキという雌の個体を新たなペアリングの可能性を模索するというところで、旭山動物園のイワンという9歳の雄とのペアリングにチャレンジしようということでした。あわせて、当時はまだ乳離れ、子離れしていなかったララと双子のイコロとキロールについて、においや声が聞こえない帯広動物園への移動を打診し、それぞれ帯広、釧路、旭山動物園の同意がいただけましたので、この段階で共同宣言を2月に発表させていただいて、新たな場所に移動させました。

この結果、非常に喜ばしいことですが、先ほど言いましたように、釧路のクルミとデナリに関しましては、繁殖行動が確認され、その後、帰ってきたデナリとララに関しましては3月の末に交尾が確認されました。それと、今まで交尾行動をしたことのなかったサツキもイワンとの間で交尾が確認されたということで、今回の移動につきましては、すべて結果を出したといたしますか、直接、妊娠、出産に結びつくかは別としまして、移動した価値はあったと私どもでは評価しております。この辺についても、近々、プレスに発表させていただきたいと考えているところでございます。それが、ホッキョクグマに関する移動でございます。

そして、2月から3月にかけて、オグロプレーリードッグに子どもが次々と誕生いたしました。全部で19頭の新しい赤ちゃんが確認されております。それと、4月9日にエゾヒグマのとわがのぼりべつクマ牧場から来園いたしました。これは、後ほどご報告いたしますし、きょうは見学していただこうと思いますが、エゾヒグマ館に入っております。

して、4月17日オープンとなっております。また、4月29日にゼニガタアザラシのミサキとジージーに雌の子どもが誕生しました。昨年、雄のまるが誕生しておりますが、それに続いて2年連続でございます。それと、5月14日に、私どもの長い間の念願でございましたシンリンオオカミのジェイとキナコに子どもが誕生してございます。これに関しましては、自分で掘った巣穴で出産しているものですから、何頭いるのかは未確認の状況でございますが、間違いなく生まれております。この辺も、近々に詳細が把握でき次第、プレスで発表させていただきたいと思っております。

そして、5月16日にはダイアナモンキーに子どもが誕生してございます。こちらも性別不明でございます。

また、5月25日にボルネオオラウータンの弟路郎、レンボーに雄の子どもが誕生してございます。レンボーは昨年5月に弟路郎の待望の花嫁としてインドネシアから来園いたしまして、すぐに結果を出したということになっております。育児も順調で、母乳によって自然に保育されております。こちらも状態は非常に安定しておりますので、今月中には一般公開できるのではないかとということで、獣医が調整中でございます。

一方、転出した動物についても説明させていただきたいと思っております。

サツキとホッキョクグマのツインズに関しましては、先ほどご説明いたしましたので、省略させていただきます。

2007年に誕生いたしましたライオンのげんきとゆうきに関しまして、げんきが那須サファリパークへ、ゆうきが釧路動物園へ移動してございます。

それと、昨年3月3日に生まれましたエランドのひなは東北サファリパークに移動してございます。

そして、昨年生まれましたゼニガタアザラシのまるにつきましては、契約の関係で5月30日に小樽水族館に移動を完了してございます。

それから、この場で一つ残念なご報告をさせていただきたいと思っております。

お手元の資料の一番最後に添付されていると思っております。

ヤギ、メンヨウに発生したヨーネ病についてでございます。

これは、4月26日に発表したプレス資料そのものでございます。

実は、私どものこども動物園で飼育しておりましたヤギ1頭からヨーネ病が検出されました。その後、11月からほかの個体については隔離し、触れ合いを中止している状況でございました。そこで、ほかの動物に関して感染していないかどうかを注意深く定期的に検査してきたところでございますが、3月、4月のモニタリング検査の結果、徐々に感染拡大が確認されました。このままでいくと全頭への感染拡大が懸念される状況に4月末になりました。この検査結果については、そのときそのときにプレスに発表させていただいたわけですが、4月26日の発表時に、偶蹄目反芻獣、キリンやエランドなどへの感染拡大も心配され、お客様や私どもの足に万が一ついたり、何らかの形での感染も懸念されるということもありまして、苦渋の決断ではありましたが、全頭淘汰の発表をさせていただ

きました。ですから、現在、私どものこども動物園にはヤギ、メンヨウがいない状態になってございます。

あわせて、ここには書いておりませんが、皆さんご承知の宮崎県での口蹄疫感染拡大のニュースがございました。これにつきましても、各動物園は対策を強調する形で実施してございます。各動物園とも、ヤギ、羊の触れ合いについては、全国的にも中止をしてございます。それと、入り口のところに関しましては、消毒薬の踏み込み消毒槽の設置を実施しております。また、イベント的なものでございますが、そうした偶蹄類がいる獣舎に一般のお客様が立ち入るきっかけとなりますバックヤードツアー等については、5月22日以降は中止している対策をとっているところでございます。

非常に長くなりましたが、21年度運営状況報告にさせていただきます。

○原田委員長 ありがとうございます。

全体的にはいい傾向に向かっているということで、大変うれしくお聞きいたしました。

それでは、ただいま報告がありましたそれぞれの項目について、一つずつ委員からのご意見をいただきたいと思っております。

まず、入園状況につきましては、平成21年度において92万人の入園者があったということです。リスタート委員会が構想計画を出した内容としましては、6年後に100万人を目指すという達成目標を数値として表記しております。ちょうど来年度で6年目になりますので、そこで100万人を達成するよう努力していきたいと考えております。しかし、これは驚異的な数値であろうというふうに思います。ここに数値が上がっておりますけれども、17年度は49万人でございましたので、約2倍に迫るということで、この数値目標に着実に、予想を上回るスピードで迫っているということでございまして、大変うれしくお聞きいたしました。

これについて、何かご意見やご質問等はございますか。

○いがらし委員 マルヤマンはいつからでしたか。

○事務局（酒井円山動物園長） 私が着任したときにはその原型がございましたので、1年前の金澤園長のころからでしょうか。

○金澤園長 そのころに話がちょっとあったぐらいですね。

○事務局（酒井円山動物園長） 顔を見たことはありますか。

○金澤委員 ないですね。

○事務局（酒井円山動物園長） 私が来た直後にそういうものがあらわれた感じです。

○いがらし委員 去年よりことしの方が定着しているということですか。

○事務局（酒井円山動物園長） そうですね。企業スポンサーもいろいろついて、グッズにしたり、歌までつくっていただいたり、着ぐるみもできたり、いろいろなイベントに呼ばれて出ておりますが、子どもたちの認知は非常に高いのではないかと思います。

○いがらし委員 それも92万人の中に相乗効果として入っていたのかなと思ったのです。マルヤマンの人気はことしの集客率に入ってくるのでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） それは全くないとは言えないと思いますし、いろいろな形であると思います。今、市内の幼稚園等からぜひ呼びたいというご要望のあるところがあれば、マルヤマンが出かけて行って、子どもたちと交流するというのもやっております。そういう地道な活動が集客に必ずいい方に影響するのだと思います。

○いがらしい委員 マルヤマンはすごく好きです。

○事務局（酒井円山動物園長） ありがとうございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

とにかく、かなりいろいろな要素の相乗効果として92万人達成という数値になったのではないかと思います。

それでは、行事等報告についてです。

92件のイベントというのはすばらしい件数ではないかと思います。内容的にも非常にオリジナリティーの高いイベントで、集客効果へ多大な影響があると思います。それぞれのイベントは、数日間、あるいは十何日間に及ぶわけですので、90件ですと4日に1回という感じですが、多分、毎日あるいは1日で複数のイベントが公開されてきたということであろうと思います。これは、飼育係あるいは市民とのコラボでございますので、市民の動物園という結果を生み出してきているのではないかと思います。動物園の一方的なイベントというよりも、市民とのコラボレーションで継続的に開催されてきたということで、大変な成果であろうと思うのです。

これにつきまして、林委員はいかがですか。

○林委員 今見ている、動物に絡んだイベントが多いのですけれども、意外にそうではなくて、動物園からいろいろなメッセージを発する場所というイメージでやってきたことがあって、それは本当にいいことだと思うのです。他の動物園にそういうものがあるのかどうかわかりませんが、僕はジャーナリズムにいますから、特徴がそうであるならば、そういうことをやっているのだということをご強調された方がいいのではないかと思います。

お客様を呼ぶためにいろいろなことをやっているのだけれども、こうやって見ると、動物にストレスをかけることは余りやっていない感じがします。動物に優しい動物園なのです。旭山動物園は、動物が登りたくないのに登らせているのです。登ったらえさがあるぞとあって、それを展示と言ったりするところと比べると、はるかに動物に優しいイベントをやっているということです。

動物展示をどこか勘違いしているところがあって、動物に対して負荷をかけて展示するのではなくて、動物のそばで遊ぶ、楽しむことを発信しているのが円山動物園だと思うのです。動物を利用して恋人たちに来てもらったり、動物園を利用して親子が一緒になったりするというイベントの方向をもっと強く打ち出すことによって、動物園の違う使い方ができているのではないかという読み込み方をしたのですが、間違いですか。やはり負荷をかけているのですか。それを聞いたかったです。

○金澤委員 それは正解だと思います。

動物に絶対ストレスをかけないというのが動物園の大前提ですから、そういう意味では、林委員は的確に見られているし、逆に言うと、それを酌んできた動物園側はすごいと思います。特に飼育員が頑張ってくれていて、すごいと思います。

先ほど、旭山動物園はハード的に動物を動かしていると言ったのですが、まさにそこなのです。円山動物園との違いは、こちらはソフトを優先してやっているのです。ところが、あそこはハードで動物を使おうという視点で入っているのです。ハードとソフトの分断をきちんやっていると、今、円山動物園はこういう結果になっていると思います。

○林委員 企業人として言うと、服部副委員長にはわかっていただけれると思うのですが、だから円山動物園はまだ余力があるのです。いざとなったときは動物を動かそうということです。何という鬼だろうと思いますが、そういうことなのです。きょうは飼育の方もいらっしゃいますが、動物に決して負荷をかけないような動物の動かし方のアイデアがここで出せる気がするのです。

○金澤委員 今、ソフトが結構充実してきたので、今度はハードに移りますね。ソフトからハードには移せるのです。ハードからソフトに移すのではないから、そこは楽なのです。ハードに移ったときに、もっと見やすいものというか、お客様としても見やすい展示に変わっていきえると思うのです。ですから、今度、うまくお金がつけば、ハードが整備されてくると、92万人が100万人を超えるぐらいの数字になってくるのです。ですから、今はちょうどいいくらいかと思って私は見ているのです。

○原田委員長 ありがとうございます。

このイベントの内容を見てみますと、まさにそうなのです。

動物園でやっていそがないイベントが結構あるのです。子育てサロンとか、地球のことを考えて行動する日などです。これだけを読むと、必ずしも動物園ではないのではないかと感じますし、環境白書をなぜ動物園で読むのかということもあります。それから、動物愛護標語の募集や、手芸工作の日にしてもそうです。動物画コンクールなどは大抵の動物園ではあるかもしれないと思うのですが、カルチャーナイト、夜の動物園、ハーティーナイトの障がい者の動物園特別招待など、一個一個見てみると、この動物園が環境教育をテーマにして、環境教育の拠点としての任務を果たそうという努力をしていると感じるのです。行事名としては、こういう名称になるのでしょうかけれども、内容的には、もう少しやわらかく、わかりやすくして、子どもたちにもというふうに関与しているのではないかと思います。しかし、取り組みの姿勢が非常にユニークでいいと思います。この辺は、円山動物園の背筋を伸ばしたい姿勢という感じがいたします。

ほかに、イベントについて、こんなことをやってはどうかということがありましたらご意見をいただきたいと思います。

○山崎委員 先ほど、環境教育とおっしゃいましたけれども、私は、個人的にはイベントには余り興味がなくて、じっくり、ゆっくり動物を見たい方なのです。私がかつとここ

に興味を持たせていただいたのは、イコロとキロルが生まれてからなのです。ただ、それも、イコロとキロルがかわいいというよりは、ララの母性にすごく衝撃を受けたのです。そういう衝撃がもとになって、動物園に通うことになったのです。

それは、大人がそういうものを受けて、子どもに伝えていくのだと思うのです。一見、子どもが楽しむ場所と思いますけれども、私は、その衝撃を受けたことによって、大人が勉強する場所なのではないかというふうに思うのです。ですから、こういう大人向けの勉強するようなイベントがあれば、もっといいのではないかと思います。

○原田委員長 いいご意見をありがとうございます。

ほかにありませんか。

○服部副委員長 先ほどの林委員のお話の続きになると思います。

いろいろなイベントが相当の回数を重ねられて、92項目にわたってやっているわけですが、この中で評価が高かったもの、あるいは評価が悪かったものをきちんと分析されているのだと思います。集客していくということを考えていけば、企業人からいけば、こういうものの事前の訴え方、興味を引くようなイベントの内容、顧客の満足度をしっかり見ていくことになろうかと思うのです。この辺の分析をしっかりされた中で次へのステップを踏んでいかなければならないということを私なりに申し上げておきたいと思います。

大変すばらしいものですが、集客がほとんどなかったもの、相当あったものがあるのだと思うのです。どれが一番人気だったのかはよくわかりませんが、そういう意味では、毎年毎年、イベントを今日まで重ねてきてこの人数になっているはずだと思います。そういったところをしっかりと分析していただければと思います。

もう一つは、集客のなかった不満足レベルのイベントであれば、阻害要因が必ず隠れているわけですから、その阻害要因を取り除くような努力をしていけば、次なる満足度の高いイベントが、そして動物園として人と動物の命のきずなをつないでいくわけですから、こういったテーマに基づいたイベントを重ねていけば100万人に向かっていけるのではないかと考えております。ぜひ努力してください。

○原田委員長 ありがとうございます。

ほかにございませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○原田委員長 なければ、次のテーマに参ります。

次に、寄附受理状況です。

アニマルファミリー、その他寄附についてです。

服部委員、この数値はどうでしょうか。

○服部副委員長 大変努力した結果の数字であることは間違いないと思います。

ただ、この中で教えていただきたいのは、アニマルファミリーは、基本構想から非常に力を入れてやっていこうという考え方があったわけでございます。そういった点で、アニマルファミリーの個別別のファミリー件数はどうのようになっているのか、そして、どの

人気が高いのかということ进行分析しておかなければならないので、その辺を教えてくださいたいと思います。

それと、相対的にアニマルファミリーの会員がアップすることは間違いないわけですね。5,000円掛ける云々と計算すればおのずと出てくるわけですがけれども、件数的にどのようにふえてきているのかを教えてくださいたいと思います。

○原田委員長 アニマルファミリーの一番人気は何なのでしょう。

○事務局（嶋内経営管理課長） 経営管理課長の嶋内でございます。

件数について説明させていただきます。

アニマルファミリー制度は、ご存じのとおり、年を4期に分けて応募する関係で、決算数字と必ずしも有効会員数が合わないのですけれども、1年前と比較いたしますと、4月1日現在の状況で有効会員口数が932口で、前年は557口になっておりますので、67%、約7割弱の増加となっております。

次に、動物別の状況でございます。

約900件のうち、ホッキョクグマのララが多くて421口、約45%を占めております。次に多いのは、シンリンオオカミのキナコで151口、約16%となっております。

○服部副委員長 4月1日現在で刻んだ数値では、932口、167%ということで、対前年比がアップしているのです。これの継続率はどのようになっておられるのですか。

○事務局（嶋内経営管理課長） 継続率については、大体5割程度となっております。前回の募集あたりからこの委員会でもご指摘がありましたが、簡単に継続できるような方策、あるいは継続率が高まるような工夫については、今、内部でさらに検討しているところでございます。

○服部副委員長 そこを質問したかったのですが、先に答えが出てきましたね。

まさに、継続しやすい方向性、そしてアニマルファミリーの会員が未来永劫に続いていくような手だてをしておかなければならないと思うのです。いつまでに検討がなされて、いつからきちんとより入会しやすい方法、より継続しやすい方法がとられるのか、時間的なものを区切った上で検討していかれるべきだと思います。

○事務局（嶋内経営管理課長） 今の制度が始まったのが平成20年4月で2年程度たつわけですが、基本的には動物への理解を深めてもらい、すそ野を広げることが一番の目的でございます。現行制度については、サービスの質あるいは動物が死亡した場合の対応など幾つか抱えている課題もありますので、制度全般のあり方についても早急に内部で検討しているところでございます。来年度、60周年を迎えるに当たりまして、そういった制度全般の改善についても検討していきたいと思っております。

○服部副委員長 もう一点、しつこい質問になるかもしれませんが、アニマルファミリーの個体はふえているのですか。前年度から比べてふえたのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） ふえました。キリンのナナコです。

○事務局（嶋内経営管理課長） ナナコは、平成22年、ことしの1月に仲間入りし

ました。その前は、21年1月ではキナコです。こういった形で動物についてはふやしております。

○服部副委員長 今後もふやしていく計画を持っておられるのですね。自分の好きな個体がいなくなってしまうと、もうファミリーをやめましたということのないように、また気持ちがほかに移れるようなメニューをたくさんつくっておかれたらよろしいのではないかと思います。

○事務局（酒井円山動物園長） きょう、後で見ていただきますけれども、今後入ったエゾヒグマのとわなど、幾つかあります。あれもこれもファミリーにしてほしいというお話もございますが、先ほど嶋内が言ったように、抱えている課題がございます。例えば、飼育員が担当しているものが著しくかぶるなど幾つもあるものですから、その辺をどう整理しながらこれを充実させていけるのかについては、もうちょっとお時間をいただいて、嶋内が言ったように結論を早く出したいと思っております。

○服部副委員長 基本的には、ことしの一つのテーマにアニマルファミリーのメンバーをどれだけふやすかという数値目標を立てていかなければいけないですね。まさに、来年は60周年を控えていることですし、市民会議、あるいはリスタート委員会の時点からアニマルファミリー制度を設けて、それは違う財源を確保しよう、担保してこうという考えでアニマルファミリー制度を導入したと思うのです。確かに、168%という数字は出ていますけれども、まだまだ余地はあるし、ふやさなければならないというふうに思うのです。そういう意味では、アニマルファミリーを主たる財源の一つにできるように努力していただきたいと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

全体的には、一般の寄附、企業、団体の寄附等も前年比では非常に高い伸びを示しているということで、うれしいことであると思えます。

私から1点です。必ず言うことにして思いますが、このアニマルファミリーについては、5,000円で、今は932口ですので、簡単に計算してしまうと、1,000口で500万円ですね。では、1万口で5,000万円ではないか、2万口で1億円ではないかということです。

つまり、アニマルファミリーに入ったらこんなにうれしいことがあるという付加価値をつけることです。ファミリーにしたというのはどういう意味かということ、いつでもここにいる、うちの子が見える、家で観察することができるということです。自分がファミリーにした動物をテレビ映像で、こんなに小さなものでいいと思うのです。ぼーっとしているからはっきり見に行こうと必ずやってきますので、そういうもので動き回っている様子を観察させるのです。

特に、夜は動物園に入れなわけですから、そういう生態を家で見られるということはすごい特典だと思うのです。そういうふうにしますと、人は必ずと言っては言い過ぎですがけれども、入ると思うのです。

頭数もふやせば倍々で、2倍にすればその倍です。1億円の倍ということです。つまり、ふえていく可能性が大いにあるのです。入園者を倍にしていくことは結構大変なことです。今までの努力で10万人、10万人、10万人というふうに積んでまいったのはすごい努力だと思いますけれども、一方では、新しいサービスで収入を上げていくのです。それで経常収支を上回れば収益が上がるわけですから、そういう目標値をつくっていかれたらどうかと思います。

全部が全部、テレビカメラを設ける必要はないのです。例えば、今年度内にトライアルとして、本当にそうなのかという画像提供をします。すべての家庭のホームページで、今の動物園のホームページを介して画像提供することは大いにできます。テレビカメラをそんなにふやさず、一つの動物についてトライアルを実際にやってみてはどうかと思うのです。それでも、ファミリー会員の増加がないのであれば、ここでもう一度別なやり方を考えるということです。

ただ、アニマルファミリーになってください、5,000円をくださいということではいなくて、リピート率ですね、とてもうれしかったので、ことしも継続したいという人が100%になるような形な手だてを考えていただきたいと思います。

ほかに何かありますでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○原田委員長 なければ、次の項目に移ります。

新着動物、出産の状況については、すごくうれしいニュースというか、まだはっきりはしませんけれども、交尾などが観察されているということです。またツインズ誕生が期待できるかもしれないということで、楽しみです。これは、動物園ファンにとっては非常にうれしいニュースであろうと思います。

きょうも、オラウータンの弟路郎のところで、おばあちゃんが一人で見えていたのです。そして、つぶやいているのです。「きょうは赤ちゃんはまだ見えないね」と言っているのです。赤ちゃんが見られるのではないかと思って来られているのです。そういうように、新しい動物の赤ちゃんは宝ですので、集客のためにうまいタイミングでニュースを流していただきたいと思います。

この前のツインズときは、監視カメラで撮ったニュースがホームページで提供されていきましたね。あれはみんながびっくりして、わくわくしていたのです。あれはいつ公開になるのだろうかという状況であったと思います。

そういう意味で、これから楽しいことがいろいろと起こるかなという感じで期待したいと思います。

運営状況報告について、特に言っておきたいことはありますか。

(「なし」と発言する者あり)

○原田委員長 なければ、次の議題に参りたいと思います。

それでは、平成22年度の予算、行事等の概要について説明をお願いいたします。

○事務局（酒井円山動物園長） それでは、平成22年度の予算、行事等の概要について、資料3-1に基づきまして説明させていただきたいと思っております。

まず、22年度の入園者目標です。

昨年は80万人でしたが、先ほどは目標以上のという話もしましたし、90万人を突破してしまいましたが、今年度も引き続き、入園者の目標は90万人とさせていただきたいと思っております。弱気ではないかというご指摘もあるかもしれませんが、昨年は、先ほども申しましたように、ツイズの効果等もございまして、当初に立てた23年度100万人の目標に向けて、今年度は90万人をしっかりと確保することを目標としたいと考えて、この数字に設定させていただきました。

続きまして、これに向けての2の予算でございます。

動物園運営管理につきましては4億4,000万円です。新たな投資といたしまして、施設の整備費に7億2,900万円、合計11億7,000万円の予算となっております。これは、昨年度の21年度予算と比較いたしますと70%増となっております。

これにつきましては、施設整備費で、一昨年はほとんど繰り越しという形でございます。施設整備費の増が70%増になっているということでございます。

そして、3の施設の予定でございます。

既にオープンした施設でございますが、北海道ゾーンのエゾヒグマ館で、4月17日のオープンでございます。また、既にオープンしておりますアジアゾーンの類人猿館に屋根をつけました。既に3月にオープンし、弟路郎、レンボー等が利用しております。また、きょう時間があればごらんいただきたいと思います。野生復帰ゾーンのオオワシ等飛行訓練繁殖用ケージということで、6月のオープンを予定してございます。

そのほか、今年度に建設予定でございますが、新は虫類・両生類館は年度内竣工を目標としまして建設を開始する予定でございます。それから、アジア館の設計、アフリカ館の基本計画がいよいよ今年度からスタートするというところでございます。

また、4としまして、経常的収支の推移でございます。

まず、2005年度の歳入合計が1億5,800万円余で、下の経常的経費の決算実績額が4億2,900万円余ということで、収支差は2億7,000万円余でございました。基本計画の中でもこの収支差をいかにしてゼロにするのかということが一つの目標でございました。今年度の2009年の決見と書いてあるところを見ていただきたいと思います。歳入の合計は3億3,400万円余で、下の経常経費の歳出は3億8,000万円余ということで、その差が4,600万円余のところまで縮まってきております。これにつきましては、90万人という目標を大幅にオーバーするお客様に来ていただきまして、入園料がふえた分での収支差になったということでございます。

この内訳でございますが、そこに書いてありますように、人件費と施設整備費を除く経常費では、海獣プールの清掃時などの水の節約で約2,000万円、それと熱帯植物館解

体や事務所の暖房抑制等で1,600万円、えさの一括購入や在庫管理の徹底などで2,300万円の節約など、トータル4,900万円ほどの経費節減を行ったということでございます。

この結果としまして、3年間の経営努力によりまして、今申しましたように2009年度の決算見込みでは4,600万円まで圧縮できたということでございます。ただ、これは決見の段階でございますので、数値分析はもう少し詳細に行った上で改めてご報告したいと考えてございます。とりあえず、決見の状況をご報告させていただきました。

続きまして、行事予定も説明します。

資料3-2でございます。

先ほど、服部副委員長から、その辺の評価、分析をきちんとするというお話もございましたが、基本的にここに出ています22年度も昨年度とほぼ同様のイベント、行事等の企画を掲げております。こうした中で、職員からの発案等を、随時、柔軟に取り上げてやっていきたいということもございますが、今年度は、これをやりつつ、そろそろ取捨選択の時期に来ていると考えていることも事実でございます。ですから、先ほど委員からご指摘もありましたように、今年度は、新しいことにチャレンジしつつ、評価をあわせてきちんとやっていくことが非常に重要だと考えております。

この中で幾つか新たな試みをご紹介しますが、23番です。これは、夏休みの企画でございます。キッズタウンを考えております。7月24日から8月8日まで16日間、キッズニアという子どもの職業体験の事業がございますが、あの動物園版ということで、動物園の中でのさまざまな飼育作業をはじめ、案内、受付、インフォメーション、売店、清掃、警備などを子どもに体験していただきます。一部、擬似的な対価もお支払いしつつ、園内で使えるということで、子どもたちに動物園の仕事を理解していただき、楽しんでいただくという企画をこの夏休みにぜひやりたいということで、今、企画を詰めているところでございます。

それから、冬の集客についてです。昨年度も冬場の集客が非常に大きな問題となりました。68番の円山動物園スノーフェスティバルを今年も予定しておりますが、ことしは札幌雪まつりの第4会場という形で観光と連携してできないかということで、観光部とも調整してこのイベントを効果のあるものにしていきたいと考えているところでございます。

今年度の予算、行事の概要につきましては、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

まず、22年度予算についてはいかがでしょうか。

入園者が約2倍になって入園料収入が約2倍になったというのはすごいですね。経常経費については大分減らしたので、差し引くと4,000万円何がしということで、見事な推移ではないかと思えます。

何かございますでしょうか。

○服部副委員長 今、委員長からお話がありましたとおり、大変な努力ですし、大変いい

数字があらわれたとっております。収支の均衡をとっていこうという基本構想の考え方があるわけですし、当初の目標どおり、60周年の2011年、17年度から6年後の23年度については均衡バランスをとっていこう、プラス・マイナス・ゼロということを目指したのですが、それが目の前に来ておまして、2009年の決算見込みが4,600万円の収支差に落ちついていくということは大変な努力だと思います。また、経費削減もしっかりやっていただいて、売り上げに対して、収入に対してはしっかり伸ばせるような努力をさせていただいているということですね。

そういう意味では、大変いい数字があらわれてきて、それが2010年度の予算にはね返っていくのだろうということで、もう少し決算をしっかりとした上で2011年度の予算はもう少し具体的な詰めをしていくべきではなからうかと思えます。

いずれにしても、入園者数の増加、あるいは、当初それに伴って無料入園者の増加も出てくるわけですから、入園料の大幅なアップは見込めません。そういう意味では、先ほど申し上げたように、アニマルファミリーの会員を2,000口、3,000口、やがては1万口というレベルまで持っていけるような兆しを新年度においてはつくり上げてほしいという感じがします。

私から一つだけ質問をします。

持続可能な目標として、基礎収支構造の均衡がどうしても必要なことは事実ですが、これには職員の人件費が含まれておりませんね。職員の人件費は、まさに17年度から見てふえてきているのか、その辺の状況がどうなっているかです。要するに、飼育員のスタッフがふえてきているのかどうかです。その辺はどうなのでしょう。

○事務局（嶋内経営管理課長） 職員数につきましては、全庁的に抑制の方向で来ております。人件費そのものについても、ベアの抑えがありますので、基本的には人件費については横ばいになっておりますし、職員数は増加しておりません。

○服部副委員長 そうなれば、飼育員の方々の努力が相当あるということですね。

○事務局（加藤環境局理事） 間違いなく人件費は下がっております。私の手取りも下がっております。

○服部副委員長 たしか、17年度で3億円ぐらいだったでしょうか。それが現状では相当下がっているというふうに見えていいのですか。

○事務局（加藤環境局理事） 10%とは言いませんけれども、手当なども含めて下がっております。恐らく5%ぐらいは下がっているのではないのでしょうか。

○服部副委員長 その中で売り上げを伸ばしておられるということは評価したいと思うし、努力しているのだという市民に対するアピールができる要因の一つになるのではないかと思います。ここであらわれない人件費についてもしっかり目を見開いてチェックしていただきたいと思えます。

○原田委員長 ありがとうございます。

ほかに何かご質問、ご意見はありますか。

○田中委員 キッドランド解体とありますけれども、観覧車など子どもが体験できる場所が少なくなっているのです。これを全部なくしてしまうのはもったいないのではないかと思います。また、キッドランドは収入源になっているのかどうかも興味がありましたので、質問させていただきます。

○原田委員長 ご質問がございましたキッドランドからの収入はどの程度のものでしょうか。

○事務局（嶋内経営管理課長）

キッドランド自体は、札幌振興公社という第三セクターが設置して、運営しております。遊戯施設利用料についても札幌振興公社の収入になっておりまして、動物園の収入には含まれておりません。

○金澤委員 動物園に入ってくるのは、公園の中で1, 300万円くらいで土地を貸していきまして、その分だけです。ですから、売り上げとしては全然入ってきません。

○事務局（酒井円山動物園長） 委員がおっしゃったように、あれだけの施設で、当然、お休みの日など、お子様方は楽しんで、動物園の乗り物に来るお客様もいると思います。先ほどもご紹介いたしましたけれども、これから基本計画にのっとり、アジア館、アフリカ館の建設を進めていきます。それは何のためにやるのかというと、今、昭和41年に建設したもので、前は象がいて、今はキリンやライオンがいるところがあります。相当老朽化してきていて建てかえを急がなければいけないのです。円山動物園は、広いようで、土地がそれほどないのです。そこで、基本計画の中では、そういう子どもたちもいるのだけれども、利用として、冬場は全く閉鎖しています。ですから、半年近くが閉鎖されていることと、当初のピーク時に比べるとお客様の利用については半分以下になってきて、平日も半分ぐらいはとまっているというのが遊園地の状況です。それであれば、動物本来の生き生きとした姿を、子どもたちを含めて見ていただくということです。そのためには、あそこを一度更地にしなければならないということで、今回は解体撤去させていただいて、まずはアジア館、その次にアフリカ館と新しい建設計画を進めさせていただくという方向です。

ただ、おっしゃったように、子どもたちがちょっと飽きてしまったときにどうするのか、休むスペースはどうするのかという今まで遊園地が担っていた機能について、残されたスペースの中でどうやっていくかを、まさにゾーンの計画の中にそういうことも含めて考えております。観覧車のような施設をつくるわけにはいかないかもしれませんが、それにかわるもので、憩いの場を考えていこうと思っています。また、動物園本来の動物の生き生きとした姿で飽きない動物園を目指すということや、こども動物園のような子どもたちが動物と触れ合えるような機能を充実させるとか、動物園本来のやり方でその部分をカバーしていきたいと考えております。

○原田委員長 この問題については、今から5年ぐらい前にリスタート委員会の中で、これを残すべきなのか、それとも別の用途にスペースを使うべきなのかをかなり慎重に検討

しましたが、全体的には、今、園長が言われたような方向に向けて進めていくということで決定しました。

そこで、基本計画の中でも、そういう方向で園内の再設計をし、それを解体して、新しいゾーンとして生まれかえさせるということで現在進行中でございます。

それでは、大体よろしいでしょうか。

○服部副委員長 もう一点です。

基本計画の中でも話題が出ていたことですが、年間パスポートの価格の適正化という問題があったと思います。現状で、入園料収入の中に占める年間パスポートの収入はどのくらいでしょうか。ほとんどが年間パスポートではなからうかと思えますけれども、この辺は数字的にははじけるのですか。また、年間パスポートの使用頻度はどの程度でしょうか。

○事務局（佐々木経営係長） 2.7倍となっています。

○服部副委員長 対前年度比ですか。

○金澤委員 1枚の券で年間パスポートを利用して入った人が2.7倍です。去年に売れたのははたしか6万枚です。6万枚売れて、15万人が入ってきているのです。ですから、回転率が2.7倍です。

○事務局（酒井円山動物園長） リピート率は毎年上がってきているのです。

○金澤委員 ただ、正直に言って、600円と1,000円で、一般入園料の割合で言うと、600円は高いのです。というのは、年に1回しか来ない可能性があるから600円です。2回以上来そうな人は1,000円なのです。

○服部副委員長 リスタート委員会するときにもこの1,000円が果たしていいかどうか、適正な価格かどうかということを相当熱っぽく語り合ったこともあるのですが、この辺のことについてはお客様である入園者の意向をどんなふうにとらえているのでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） 市民アンケートの結果でも、この年間パスポートの金額である1,000円については、一般の市民の方が安過ぎるととらえている方が7割ぐらいいらっしゃるのです。

○服部副委員長 18年のアンケートのときにそういうことが出ていましたね。

○金澤委員 基本構想の中では、大体23年を目安にしているのですが、100万人を超えた時点で、100万人とは言っていないのですが、魅力が整ったときに値上げを検討しようということにしていたのです。ですから、目安として23年度に100万人になるから、そのときに1,000円を1,500円に上げて落ち込む割合を何とかカバーして、100万人をちょっと切るぐらいで整理がつくのではないかという議論をしていたのです。

○服部副委員長 そういう意味では、2011年度が平成23年度で、その時期に来ておりますので、今年度から少しずつその辺についても検討に着手していかなければならないということだと思っております。

上げるかどうかの議論は全然別として見ても、適正かどうかを今年1年かけて評価して

いくべきだろうと思うのです。そうしないと、来年に入って、さあ評価しましょうかというわけにはいかないです。100万人を一つのめどとして動いていきますから、準備を怠りなきよう、調査検討していただければと思います。

○事務局（嶋内経営管理課長） 年間パスポートのデータをご説明いたします。

平成21年度は約92万人の入園者がおりますが、そのうち年間パスポートを利用されている方は約18万3,000人で、大体20%程度になっております。参考として、平成20年度は約70万人のうち約12万人で、17%程度となっております。

○原田委員長 検討を続けましょうということでございます。

それでは、議題（3）に参りたいと思います。

エゾヒグマ館のオープンについて、園からご説明をお願いします。

○事務局（酒井円山動物園長） なるべく早く説明を終わらせていただいて、委員の皆さんでご見学をいただきたいと思いますが、概要だけを簡単にご説明いたします。

このエゾヒグマ館につきましては、まさに北海道に生息し、陸生動物の中では日本最大の動物エゾヒグマを生き生きと展示して、それを入園者に見ていただくことをコンセプトにし、この見せ方、デザインにつきましては、原田学長の札幌市立大学デザイン学部の先生方のご協力をいただいて設計、施工したところでございます。

コンセプトとしては、ランドスケープ・イマージョンという形で北海道の原生林の中に埋没するかのごとくの獣舎をつくり、周りの原生林等の風景と溶け込んで非常に広く感じられるような空間を演出しようということです。いろいろなところにクマの行動を引きだすような工夫も凝らしながら、生態を十分に観察できるようにしようというものです。

また、実際のクマの出没状況などをあわせて展示することによって、エゾヒグマが我々札幌市民にとって身近なところにあるながら、よく知らないエゾヒグマの生き生きとした姿を見ていただくということをコンセプトにつくった施設でございます。

結果として、非常に元気な個体に来ていただいて、中で走り回るし、木に登るということで、想定外の動きも相当ありまして、北海道の大自然を再現してつくったのですが、それをほじくり返されました。この間、学長にも来ていただいて、裸の山になっていたというご指摘もありましたが、それほど元気で、見ていただいたお客様も喜んでいるということです。一部にデッドスペースが若干できて、よく見えないところが出ておりますので、それにどういう対応をするかということがあります。また、現在は2歳の雌グマ1頭ですから、大きな雄グマを見ていただくということが一つのコンセプトでしたので、雄グマの導入を検討しておりまして、できれば秋ぐらいに、当初は小グマを入れようと思っておりますが、雄のエゾヒグマの導入もあわせて考えているところでございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

これにつきましては、また後で実際に現地に行ってみていただくということでございますが、何かご質問はございますか。

（「なし」と発言する者あり）

○原田委員長 それでは、次に参りましょう。

議題（４）市民アンケートの結果についてです。

これは、ゾウについてですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 象ですが、その前にテーマ１の後ろを見ていただきたいと思ひます。市民アンケートの結果、円山動物園の必要性ということでございます。

実は、前金澤園長から今回のアンケート結果は非常にすばらしい結果が出ているというお話をいただきまして、それを皆様にもご紹介したいということで用意いたしました。

円山動物園の必要性について、２００６年と昨年暮れの２００９年１２月でとってございますが、ほぼ同じ質問をしまして、円山動物園はあなたにとって欠かせない存在だと思ひますか、それともあつた方がよい存在ですか、必要だと思わない、それ以外ですかというような質問をしまして、その比較でございます。

実は、「欠かせない存在」と「あつた方がよい」をあわせると、２００６年は９０％を超えまして９０．５％です。ところが、２００９年は、「欠かせない存在」と「あつた方がよい」を足すと８５％程度なのです。これだけを見ると、全体として下がったのかということになるのですが、内訳の中身が全然違つたということです。

「欠かせない存在」と答えた市民がこの３年間で５倍以上、６倍近くになつて、動物園に対してどうしても必要なものなのだと評価していただくに至つてるところでございます。

この内容は、我々がやってきて本当によかつたという数字ではないかということで、ご紹介させていただきました。

そのアンケートと同時に、委員会の中でのお話で、象の導入の必要性についてどう考えるのかというアンケートを同じく１２月にとつてございます。

どういう設問かという、問５としまして、現在、円山動物園には象がいません。新たな象舎を建設するには多額な費用がかかり、これは円山動物園独自ではまだはじいておりませんが、他の例では建設費が８億円から１３億円程度が必要になります。あなたは象の導入についてどう思ひますかという質問をしました。負担についてもこれだけありますということです。回答は、「それでも導入すべき」「導入すべきでない」「どちらともいえない」という大きく三つに分類されておりますが、「それでも導入すべき」は２５．８％で４分の１強です。これに対して「導入すべきでない」が２２．２％となっております。「どちらともいえない」が４３．５％でございます。

これを今後どういうふうにとらえるかということでございますが、現状は、我々としてもまだ情報をほとんど持ち得ていない中での設問として、唯一、建設費が１０億円ぐらいかかるという投げかけに対しての反応だということでございます。

今後は、前回の第８回目の中でもお話があつたと思ひますが、私どもといたしましては、これらについて専門家から意見を出していただき、この先、札幌で象を導入するためには何を検討すべきなのか、何を詰めていって、市民の皆様へ情報提供して導入の可否につ

いて判断すべきなのかという項目について、昨年度、象の専門家に意見を聞いてございます。

それが次の資料6-1でございます。

今後、象を円山動物園に導入する場合の諸課題と解決方法について、どうしたらいいのかということ象の専門家に聞きました。象の専門家といますのは、上野動物園で象の飼育係を40年以上やられていた川口さんで、現在は象専門のコンサルをやられている方ですが、その方を招いて、私どもと意見交換をし、レポートを書いていただいて、我々として今後どうすべきなのかという検討をしました。

どういった内容かといいますと、アジア各国の象の飼育状況の現状について、象を導入する具体的な手法について、実際に象を飼うとするとどのような施設が必要で、どのような飼育体制が必要か、また、それにかかわる職員の研修をどのくらいやらなければならないのかというものでございます。

具体的には、これから内容を詰めていきますが、4にそのボリューム感を書いてございます。アジア象に関しましては、ワシントン条約では、野生個体は研究目的以外では導入できないと明記されており、導入できる個体とすれば、飼育下で繁殖した個体に限定されている現状があります。そういう中で、どこの国からどのように導入するのがふさわしいのかをリサーチしなければならないだろうということです。東南アジア各国の国内情勢等もございまして、そういったことも含めて、今年度は具体的にリサーチしようと考えてございます。

そのほか、象の導入に係る具体的な手法について、6カ月の現地での研究が必要であるとか、経産省等の申請するときに繁殖計画をつくらなければならないとか、その場合には園長をトップとする繁殖プロジェクトチームの作成が必要であるなどがあります。また、アジア諸国から象を導入する場合には、確約はなかなか難しいのです。何年先に入れるというような確約は難しいので、そういったタイミングや導入の決断が非常に難しい現状であるということがわかっております。それに対して、我々はどう向き合っていくのかを考えなければなりません。

そのほか、象舎についてです。現在の象舎を改修、補強等をして使うのか、また新たに整備するのかということです。これにつきましても、北海道という積雪寒冷地の中で象を飼うのにふさわしい施設はどういうものなのかを具体的に考える必要があるということです。

それから、職員の研修などについてです。繁殖を成功させるということが前提ですので、それに向けた職員の研修をどのようにやっていくのか。学ぶとすると、北海道と同様に寒冷地で象を飼育し、実際に繁殖を成功させているヨーロッパ等の代表的な動物園への視察などもこの先は考える必要があるのではないかなというようなアドバイスをいただいております。こうした昨年の調査に基づきまして、今年度は、これらを具体的に検討していくことが我々に課せられている課題であるということをご報告いたします。

この辺の検討につきまして、具体的に見えてまいりましたら、この会議にお諮りしてご議論していただくよう準備していきたいと考えてございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

まず最初に、動物園の必要性に関するアンケートがありました。これは、素晴らしいことで、必要性に対する反応がこの4年間で変化したという結果があらわれています。実際にどれぐらい変わったのかというのは、「欠かせない存在」という回答を5点にして、4点、3点、2点、1点として掛け合わせて加算するとこんなに違ったという結果がはっきりわかるのではないかと思います。これは、なかなかいい傾向に来ていると思います。

象の導入については、これを見ると10億円をかけても導入すべきがそれほど上がっていないような感じがいたします。ただ、象の導入にかかわる調査の内容で、こういう効果がある、あるいはこういうことが必要だ、生物多様性の保全ということから意味があります、繁殖を含んだ研究という対象として重要なことですよというような効果について解説をきちんと加えて、改めてリサーチを行うというふうに考えてやってみると、もっといい結果が得られるのかもしれないと思います。ただ、導入するか、しないかというふうに聞くと、こういう結果になるのではないかということがあらわれている気がいたします。

これについて、何かご意見はございますか。

絶対に導入すべき、あるいは、今、動物園サイドでは、慎重に声を聞きたい、それを待って判断をしましょうという考えのようですが、いかがでしょうか。

○林委員 僕らも、マスコミでアンケートをとることがよくありますが、アンケートには限界があると思うのです。つまり、右へ行きますか、左へ行きますかと言われれば、真ん中はないですかと勇気を持って言う人もいますけれども右か左のどちらかを選ぶわけです。そのときに、その人の懐ぐあいもありますし、その人の市に対する不満もあるかもしれません。さまざまなことが内在してあらわれているわけで、純粹に象に関して考えているか、あるいはライオンについて考えているかということ、そうではないわけです。

基本的に市がどのような形でどういうふうにやっていくか。あるいは、委員からの意見を聞きながら、もっと広いところで意見を聞くのです。その中でコントロールしやすい、市の財政として、あるいは飼育員の人たちがコントロールしやすいというものを通して選んでやっていくしかないと思うのです。それが無理だというのは無理なのです。

アンケートには限界があると思うのです。あくまでも、皆さんにお伺いしましたと、これが要らないという方が圧倒的ならば注意深くしなければならぬのですが、これは財政面だと思うのです。ただ、悲しいかな、服部副委員長はそういう嫌な役割になっておりますけれども、お金の話をシビアにされておりますね。やはり、動物園に欠かせない存在だと言われるような象がないのはどうなのだろうかと考えると、当然、アンケートの答えは変わってくると思うのです。欠かせない存在の象は残念ながらいないのです、これは誘導だと言われれば誘導です。

そういう意味で言うと、料金にしてもそうです。経済がかなりしぼみかけていますし、

今は安・近・短でふえているところもたくさんあるような気がしているので、慎重に考えなければならぬと思うのです。

最近、運動会をかみさんとのぞいたのですけれども、大人の間にも子どもがいるのです。僕たちの時代は、団塊の世代ですから、父さん、母さんが見に来てくれない子どもたちがごまんという中で、自分たちで運動会をやっていたものですから、先生たちがただ見てくれている時代だったのです。それが、おじいちゃんからおばあちゃんから全員が来て、子どもの負担は大変だと思いました。そういう運動会を動物園に例えると、先ほど山崎委員がおっしゃったように、大人が楽しめる動物園をつくるのが、実は動物園の人口をふやすのだと思います。ですから、長期的に考えると、値段のことも含めて上げ方も考えて象のことを考えなければいけないのです。

そうすると、アンケートで、さあ、丁か半かなんていうものではないところに入っているのです。そこに導入のこともお金のことも入っている気がするのです。

少子化の問題と高齢化の問題で、動物園におじいちゃん、おばあちゃんに来るようになると思うのです。老人たちが来られるような動物園をつくるということです。ですから、山崎委員の大人が楽しめて、少ない子どもを連れてくるということに動員するためには、何か工夫して考えなければいけないと思うのです。いつも、こういう項目で書かれていますので、どういうふうな方向へ向かうのかはわかりません。レディースなどいろいろなことが書いておりますけれども、そういう人たちにどうお金を出して、来ていただくかということが大切だと思うのです。

そこに向かってどうするか、象の話というのは、そういう上に立って考えるということです。総合的に言って申しわけないのですけれども、全部が絡んでいると思うのです。収益をどうして得るのか、どういうふうに収入を得るのかということです。簡単にかいつまんで言えば、象の導入に関しては、これから動物園側が主体的に結論を出すことが大切なのではないかと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

まさに、そのとおりだと思うのです。

これは聞き方にもよると思うのですけれども、最近のはやりの手法で、ただアンケートで必要、必要ではないということではなくて、もしあなただったらどれくらい負担できますかとするのです。1,000円なのか、1万円なのか、10万円くらい負担できるとか、500円でごめんとか、そういうスケールが書いてあって丸をつけるようになっているのです。ぜひとも賛成と言っている人はどこにつけているのか。それから、先ほどのパーセンテージで掛け合わせると出てきてしまうのです。まあ、必要と言う人たちが何%いるのであれば、その人たちは幾らくらい負担できると言っているのか。それで母数に対して何%掛ける幾らで加算して、総計が工事費の総額になるのです。

いずれにしても、これは市がつくることになるので市民税を使うことになるわけですから、それを市民が負担するというところに直結しているわけです。それを間接的に言っているだ

けですが、市民税をこれだけ使いますよではなくて、あなた個人はどれぐらい負担できると思うのかというような聞き方を、結構大型のプロジェクトの調査ではよくされるのです。

これも仮想的な質問ですから、負担すると言ったではないか、だから実際にちょうだいというわけにはいかないわけですがけれども、目安にはなるのです。そういう調査方法が片方ではあるのです。ですから、もう少し踏み込んで、どこまで許容できるかですね。

先ほど、動物園の質問の中で、税金を使う必要がないという項目が2006年には3.6%いたということがありますので、象にそんな税金をなぜ使うのかということも含めて、負担できる額みたいなもので、本当に10億円が賄えるのかどうかは探りをきちんと入れるおく必要があるのではないかと思います。

ほかに何かご意見はございますでしょうか。

○金澤委員 私は、林委員も原田委員長が言われたことも十分承知の上で、また賛成ですが、動物園として象は必要だということで、なぜ必要かという理由をきちんと整理してやることで、かつ、それにかかわってどのぐらいのお金がかかるという整理をすると、市民は結構理解してくれるのだと思うのです。しかも、それこそアバウトに、ほかの動物園なら8億円から13億円ぐらいかかりますと言っても、何のお金がかかるかよくわからない状態で書いていますから、それをもう少しわかるようにしたら、反応が返ってくると思うのです。

特に、先ほどの話ではないですけれども、アンケートに「欠かせない存在」の割合がすごく高くなったのです。絶対必要だという意味ですし、そういう方がたくさんいるのです。しかも、今まで動物園がやってきたソフトを中心とした事業が——あの事業は、先ほど山崎委員が大人が楽しめると言われたのですけれども、大人をターゲットにしたイベントを組んできた結果、こうなったのです。今、有料と無料の割合でいくと、有料は55%ぐらいまでになってきているのです。前は、委員長がかかわってやろうかといったときは30%何ぼです。40%ぎりぎりなのです。それから見るとすごく変わってきているのです。そういう中で必要かどうかなのです。

そういった見方をしてくれると、きっと応援団ができるはずなのです。先ほど、林委員が言われたように、動物園のスタンスをきちんちと決めて、展示する背景はこういうことだということができれば、全然怖いものではないのです。アンケートの「どちらともいえない」というのは、右か左かの判断がつかない人たちですから、そこをしっかりとやればいいと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

それでは、象に関してはこの程度にしたいと思います。

以上、用意している議題についていろいろなご意見もお聞きました。この後は園内視察でございますので、このあたりで閉めてよろしいでしょうか。

○金澤委員 ちょっといいですか。

21年度、22年度の話が出てきましたね。来年度の事業は出ているのですけれども、23年度がちょうど60周年です。60周年にどうするかという議論を、動物園もそうだ

し、ここの会議でも一度議論をしておいた方がいいと思うのです。はっきり言って、23年度に100万人を目標にしておりますからね。ですから、次回に、その辺のデータを動物園の方でそろえていただいて、その議論をある程度しなければいけないと思います。

次回は何月ぐらいですか。

○事務局（嶋内経営管理課長） 次回は、秋口をめどにと考えております。

○金澤委員 予算とかかわるので、その時期を逃さないように議論したいと思うのです。そうしないと、後から来年度に何かしたいと言って、この会議がもっとこうやったらと言ったときには手おくれになる可能性があるのです。

○原田委員長 予算申請はいつぐらいまでなのですか。

○事務局（嶋内経営管理課長） 9月末ぐらいです。

○原田委員長 それまでにまとめなければいけないということですね。

○金澤委員 ですから、議論というか、アイデアを出して、アバウトでもこのぐらいのお金がかかるよねということと言わないと、動物園は対応できないと思うのです。

○原田委員長 私は、この動物園の改修計画、あるいは新築の計画、新しいゾーンの構想の実現計画など、短期集中期間と呼んでおりまして、とにかくそこまでに最初に構想した計画を実現させようとしています。100万人もそのうちの一つです。そして、経常経費の30%減など、もろもろの目標値をこの期間で達成しようということでございますので、PACDサイクルといいますか、Cのチェックです。そもそも監査というところから出発しておりまして、監査事項の事項内容に沿って、このようにするという改善策をアクトします。それを構想計画として作りまして、プランを基本計画案として取りまとめました。それが、現在、実行に移されているのです。そういうPDCAサイクルの上にきちんと乗った上で、6年目においてきちんとした評価結果を出して、評価報告書をつくって、お祝いをしたいと考えているのです。

そういうわけで、突然、6年目にさあ出せと言われても難しいので、少しずつ分担して、それぞれ表記していただきたいと思います。やはり、リスタートがかかったということでもありますので、その結果、このように改善ができたというアウトカム、成果を、薄いものでも結構ですけれども、きちんとした報告書として出すべきではないかと思います。それをもって次の第2段階のスタートにしたいと思うのです。

その第2段階のスタートで、この市民会議をどうするのかも含めて、あるいは、第2段階の短期計画をつくるのかということもございますけれども、少し時間をかけて、どのように進めるのかというあたりの準備が必要だと思います。そのベースの上に60周年記念を祝う計画を進めていったらいいのではないかと思います。

何かすっぽ抜けてしまってお祝いするというのも気になると思いますので、きちんとけじめをつけて、お祝いするところは大きいにお祝いしたいと思っております。

ご意見がございましたらお願いします。

○服部副委員長 そのとおりで、60周年100万人プロジェクトやプランをつくり上げ

ていかなければいけないと思うのです。それが6年間の集大成で、この市民会議としても集大成でまとめ上げなければいけません。

○原田委員長 それを行うに当たって、予算計画も含めて、8月ぐらいをめぐりもう一度この会議を開いて、そこで大ざっぱな検討をして、予算の内容については別ですけども、こういう手順を進めましょうという合意を得ておいたらよろしいのではないかと思います。

林委員から何かございますか。

○林委員 仕事もそうですけれども、市の予算が非常に厳しいことはよくわかっています。きょう、服部副委員長が、頑張ってくださいと、すごく優しいことを言いました。僕からすると、来年、この目標を達成できる可能性は、このポテンシャルから言うと、ホッキョクグマなどさまざまなことを含めて言うと、薄いだろうと思います。服部副委員長が言われないので、あえて僕が言います。

しかし、委員長がおっしゃったことは、予算をうまく使って、来年の予算を立てて、何とか達成し、達成できなくてもこういう結果だと、これがプラスに働けばこうだということやればいいのではないかということだと思うのです。つまり、達成しなくても、もしかすると、いい意味で、おめでとうございます、残念ながらということがあると思うのです。

そういう意味では、さまざまなことで収入の変化があらわれていますね。これを維持、継続できるのかということを含めて、今、社会の構造がすごく変わってきているのです。僕らの広告の中でもそうですけれども、収入の構造が変わってきているのです。要するに、広告の構造も変わってきているのです。一番希望がないのは、税収が間違いなく下がることを国民は皆承知しているわけです。人口減少において、圧倒的にやってくることは間違いのないわけです。

そういう意味では、外のお金をどうやって集めてくるかであったり、今までなかったものをどうとってやるかということだと思うのです。そういうことを積極的に市はやっていらっしゃらなかったと思うのです。やっていらっしゃらなかったと言うのは失礼ですけども、やっていなかったのです。そういう部分をもっと強く打ち出されることによって、今、委員長がおっしゃったようなことが支えられていくのではないかと思います。

逆に言えば、寄附がこれだけ上がり、ファミリーもこれだけ上がりました。ファミリーの場合は、僕は意見がちょっと違って、経費もかかるので、使えるお金が結構足りないと思っているのです。企業で言えば、売り上げが上がるのだけれども、利益が出ていないという形になるのです。これはこれで、市民をたくさん呼ぶということにつなげていくというか、入園者をふやすという意味では、売り上げだけで考えようということに割り切れればいいと思うのです。寄附とか市民の意識などを醸成していったら、この金額が上がっていくということは、実はすてきなことなのだと思うのです。税収は下がっても、動物園に出そうという気持ちは、もしかすると望みがあるかもしれないと思うのです。

この寄附に関して言うと、道内ばかりをターゲットにする必要は全くないわけです。アニマルファミリーの場合、そういう意味では、収入構造を考えていただくということも含

めてどうでしょうか。決定するのは動物園だと思います。

○服部副委員長 私なりに頑張ったと言ったもう一つの意味合いは、楽観視する一つの要因になるかということで、とらえ方でしょうけれども、実は、時折に来てみると、中国の言葉が行き交っているのです。韓国の言葉が行き交っているのです。そういうことを考えると園内の努力によって、表示の内容も当然のごとく必要になってくるでしょう。外国からの観光客の受け入れをどうするのかをもう少し真剣に考えていけば、数字を確保できる要素はあるのではないかと思うのです。

ただ、今の園路の表示その他を含めて考えると、受け入れの体制には全然なっていないということが言えると思います。その辺の工夫、検討、実行をしていけばいいのではないのでしょうか。当然、中国からの観光客があふれるというふうにならざる状況の中で言われるわけですし、実際、そのように動き始めてきているわけです。時折来てみると、中国の言葉、あるいは韓国の言葉が行き交ってきているというのは、ある意味で楽観視することができるものであるし、600円の数をふやすことができるようになるのではないかと思うのです。ぜひ、その辺も次回の市民会議の中で検討する議題に上げてほしいと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

きょう、ご発言がなかった堀田委員から何かございますか。

○堀田委員 思っていることを皆さんに言っていただけたので、よろしいです。

○原田委員長 いがらし委員はいかがですか。

○いがらし委員 象さんが欲しいです。

○原田委員長 ということでございます。

それでは、議事はこのあたりにして閉じさせていただきます。

今回は、改めてということになりますか。

○事務局（酒井円山動物園長） 今、お話をいただきましたので、秋よりも手前で、お盆が明けて、8月末ぐらいをめどに調整させていただきたいと思います。

○原田委員長 そういうことでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○原田委員長 それでは、今回は8月末までとさせていただきます。

4. 閉 会

○原田委員長 それでは、これから園内視察をしたいと思います。

以 上